CIAS

Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

Newsletter No.19

2 座談会
地域研究情報資源と相関型地域研究の未来

6 地域研究統合情報センターから東南アジア地域研究研究所へ

7 CIAS 創立 10 周年記念ワークショップ 開催報告
〈地域〉を測量る～混迷する現代世界にむけて～
地域研 10 周年記念祝賀会

8 受賞
村上准教授が大同生命地域研究奨励賞を受賞
「災害対応の地域研究」プロジェクトが地域研究コンソーシアム賞を受賞
中山大将（地域研・助教）著『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成：周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』（京都大学学術出版会、2014 年）が 2016 年 3 月に日本農業史学会賞を受賞

9 イベント
JCAS シンポジウムとワークショップの開催報告
研究会「2016 年フィリピン大統領選挙を考える」(2016 年 6 月 10 日)報告
選挙を契機とした地域理解の見直し
国際ワークショップ “Buddhism and Contemporary Living Environment over Asia” を開催
International Workshop “Toward Building Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia” の開催報告
研究会「写真が開く地域研究」開催報告
国際ワークショップ “Harvard-Yenching Library New Holdings in Manchukuo History: Needs and Opportunities”
研究会「誤差か、発見の糸口か？―情報学的分析結果を学際的に評価する―」報告

13 旅紀行「アジア農村研究会の南インド訪問記」

14 出版物の紹介

15 退職にあたって

16 松浦先生が着任されました
The Last Photograph

座　談　会

地域研究情報資源と相関型地域研究の未来

社会に役立つ地域研究

亀田●今回の対談は、地域研究統合情報センターが東南アジア研究所と統合して東南アジア地域研究研究所になるにあたって、というテーマです。今までニュースレターのインタビュー記事に登場していない助教２人で、振り返るというよりは、今後何をしていくべきかとか、どういう可能性があるかとか、将来に向けての話をしたいと思っています。よろしくお願いします。

中山●よろしくお願いします。

亀田●まずは昨日の JCAS シンポでの議論[①]あたりをネタに、地域研究について考えましょうか。

中山●はい。地域研究とディシプリンの関係が議論されていましたが、上の世代は、歴史学や政治学というディシプリンを身につけたうえで地域に入って、徐々に現在の地域研究にシフトしていった。地域研究を地域研究として大学の初めから学んだ世代には、ディシプリンをもっていないのが弱みなのかもしれないと思っている人もいます。その地域の言語ができるくらいのことは言えるんだけど、それで調査をするとなると外務省の調査員とかはできても、それだけでは研究者としては不充分ではないかと。私が地域研究という枠を意識したのは、このポストの公募があってからですね。

亀田●一方で、ディシプリンを定めないでよいのではないか、地域があればよいのではないかという意見も出てましたよね。それは既存の「ディシプリン」にこだわる必要がない、弱みと思う必要はないというメッセージだとも受け取れたのですが。

中山●地域という枠もまた難しいですよね。民族とかとは違って、私はサハリンに興味があるので、別にロシア人全般に興味があるわけじゃない。たとえばモスクワにいる人たちに対しての興味は一般の方々と変わらないレベルなわけで、韓国にいる韓国人に対しても同じ。サハリンにかかわるロシア人や朝鮮人には興味を持って接しているわけです。東南研は国単位の人も多いんじゃないですか？

亀田●でも少なくとも（新所長の）河野さんはトランスボーダーとか humanosphere とかよくおっしゃってるし、是非とも国境にとらわれずそういう攻め方に力入れていってほしいなと個人的には思いますけど。そういえば、地域を Area vs Region という形で区別して話がさ

れていましたけれど、その Region ってのはどういう地域を指していたんでしたっけ。

中山● EU とか環太平洋とかですね。

亀田●それでいうと、新研究所内のセンターであるグローカル情報ネットワークでは環太平洋を重点的に扱うという話も出ていて、JCAS での結論である、地域研究の「地域」は Area だという結論とはズレがありますね。もう一点大きなズレだなと思ったのが、シンポでも政府のシンクタンクにならずに政策と研究の距離を適切に保ってきた先人の努力の話が出ていました。一方で今回の統合に伴う名称問題で、今の日本の政治レベルで考えて東南アジアがアツいから東南アジアという枠を看板として推していくという意見を聞いたんですけど、それはすこし危ないなとも思います。インテリジェンス[②]としての地域研究というのが元々アメリカでの地域研究で、京都大学の地域研究はそうじゃありませんって言ってるんですから、それは貫いてほしい。結果的にいろんな形で社会の役に立つのは大歓迎ですけど。そこで学問側が自律性を失ってしまったらいけない。

中山●役に立つという意味で言うと、地域研究は現代社会のプラクティカルな問題に取り組むという重要な側面があります。例えば歴史学をやってた人が「地域研究始めました」って時の違いは、現代社会との関わりを考え始めるってことなんじゃないかと思うんですね。

亀田●確かに、それはそうですね、必ずしも政治的に役に立つ必要はないけれど、社会の役に立つというのが建前じゃなくて本音で言えるのは地域研究の強みかもしれません。特徴的なイベントの一つが、フィリピンの大統領誕生に際してのシンポジウムとか、ウクライナ侵攻の時の JCAS のシンポジウムとか。

中山●ああいうのはネット配信とかすればもっと多くの人に興味を持ってもらえますよね。こっちからもジャーナリストとかにアプローチしていったりして。社会にどう役立つかをもっと考えないといけないですね。

研究成果の公開について

中山●研究成果の公開として出版にお金をかけている気がしますけれど、必ずしも紙の本を出版してもらう必要はない時代なんじゃないか。読者を増やすという観点で言うと、オンラインで公開してその広報にお金をかけたほうがいい。

亀田●ある写真のデータベースは、全部の写真を入れたデータベースと、旅行記のように取捨選択してレイアウトした本と、２つのものを用意しようとプロジェクトが進んでいて、こういう役割分担はいいなと思っています。

中山●例えば、ある引揚者団体が、引揚げに関わる引揚証明書などの所蔵物を図録にしたと聞いた時に、目録が出てくると思って研究者は期待したんですけど、出てきたものは「食べる」「生きる」みたいな枠で整理された思い出アルバムみたいなものが出てきて、研究者としてはがっかりでした。でもまあ当事者たちのニーズを考えれば当然で。

亀田●研究者や当事者は一次資料を扱って、それをストーリー付けしたものが一般の人に供されるという形ですね。

中山●でも、一次資料が一般の人に見えたほうがいいというケースも多いです。例えば虐殺があったかなかったか、どういう規模だったか、ってのは研究者の間でも相違があったりしますが、それぞれのストーリーが世間に伝わる時に一次資料もアクセスできる状態じゃないと、一般の人もストーリーの受け入れようがないです。

亀田●ストーリー付けされたものと、その背景の一次資料の共有と、どちらも大切、と。

中山●理系の人が新聞に不満を持つのは、メディア発信者側のリテラシーの低さなんですよね。技術リスクの問題とかは「0 か 1 か」じゃないのに新聞は「0 か 1 か」で書きたがる。読者の中にはそれなりに知識のある人もいるのだから、本当は、リスクの、つまり確率のままで書いてしまって、それを読む人の判断に委ねてしまった方が良い。そこを変に「0 か 1 か」で書いてしまうから混乱を来す。これは地域研究にも言えることであって、資料の整理やそこから言える最低限のことは研究者が発信して、最終的な解釈は読者にゆだねるという形がもっとあってもよいのかもしれない。研究者もデータをもとに自分なりの結論や意見はもちろん持つけど、押しつけはしない。

亀田●そうですね。人文社会系のデータベースは細かいデータベースがたくさんある形になりますけど、これを RDF と呼ばれる細切れで切り貼りしやすい形式で公開して、利用に応じて繋げていくという構想は進んでいます。

中山●科研のプロジェクトくらいの規模で My データベース[③]を誰か一人が使えたらいいなと思います。なかなか共有にハードルがある人もいますけど。

亀田●まあ、それはできるところからやるしかないですね。それから、公開までこぎつけるのは研究者にとっていろいろ大変なので、データベース作りに関する賞を出したりオーソライズしたりしてあげることで、国への報告書に書けるようにしてあげないといけない。データベースの評価基盤が大事ってことですね。最近は自然科学系だとデータジャーナルというデータの公開提供に際してその説明と評価をつけることでジャーナル扱いするような枠ができていますけれど、人文社会系データジャーナルを新研究所が発行するとかは良いかもしれない。

中山●評価という意味で言うと、画像に CIAS とか入れなくていいんですかね。

亀田●画像に文字を埋め込んでしまうのは個人的に好きじゃないですが、画像だけを手掛かりに来歴を引けるデータベースとかは必要だと思います。研究者は出典がわからないと使えないので。PDF とか JPEG とかは著作権情報をファイルのメタデータに埋め込むことができたりもするので、そういう情報の埋め込みも大事かもしれません。

中山●データベースって引用元として書いてもらいにくいですよね。特に、データベースに概要情報や画像があって、それを手掛かりに所蔵館に資料を見に行った場合は資料の書誌情報だけを引用先として書くことになる。論文を書くために利用してもらっていても引用元として書いてもらえないなら、作ったほうが損っていう部分もありますね。実物主義みたいのがまだまだ強いせいもあるかもしれませんが。

亀田● Linking Open Data cloud diagram[4] という図は、論文になっているわけじゃないですけど、こう引用してね、とウェブページに書かれていて、数百件引用されていたりするので、そういう手はあります。

中山●なるほど。

亀田●あと、この前「ねむり展」というイベントをアジア・アフリカ地域研究研究科 (ASAFAS) の先生がやっていて、アフリカの木の堅い枕などが展示されていて、「こんなんでよく寝れるなぁ」とか思いながら楽しんだんですけれど、地域研究は博物館展示とも親和性が高いので、なんらかの形で研究成果を展示につなげるというのも大事かもしれないです。ゲノムのデータにデータベースのアクセス数としては勝てなくても、データベースのコンテンツを展示したときの来客数なら勝てそうな気はします。他にも、Wikimedia commons にデータを出して、Wikipedia で新研究所の資料を使ってもらうとか、そういう活動してみるのもいいかもしれないですね。独自研究にならないようにとか、特筆性を満たすようにとかいろいろ気にする必要はありますけど。

もっと連携を

中山● JCAS で将来の話を話し合った時に、10 代みたいな若い層をターゲットにって話が出て、20 代 30 代はどうなるんだ⁉ って思いましたね。幼稚園児とかも重要だとか、それは分かるんですけど。

亀田● 20 代 30 代の研究者が魅力的じゃないと、結局下もついてこないですよね。彼らが 20 代 30 代になった時に良い環境が与えられないんだったら、単に詐欺的な広告でだまそうとしているようなもの。

中山●ディシプリンなくてもいいんだと言いながら、結局それではポストが無いんなら、ディシプリン回帰するしかない。地域研究って名乗らなくなって「中国研究やってます」とかになっていく。

亀田●「地域研究」を意識することの価値とかはないでしょうか。やっぱ相関ってところには魅力があるとか思っているんですが。

中山●顕著なのが台湾とかなんですけど、台湾研究やってる人は「台湾好き‼」でやってて、大陸（中華人民共和国）に行ったことがなかったり関心も持っていなかったり、あるいは他の地域との比較にもあまり必然性を感じていない若い台湾研究者が意外に多いようなんです。僕は南京に留学したときに台湾に興味を持ったから中華圏の一部としての台湾という視点もあるわけです。でも、大陸との関係を考えないで台湾だけを見た台湾研究をやっちゃうと、相関研究にはならないですよね。

亀田●それは一人の研究者が複数の地域をみるべきでしょうか。

中山●地域研究という枠があることで、他の地域にも目を向けるということは意識されるでしょうね。でも一方で、連携も大切です。「問答」[5]みたいな人材リソースリストが地域研究についてあると、地域研究者同士も連携しやすくなりますし、ジャーナリストみたいな研究者以外の方々からもアクセスしやすくなるかもしれません。

亀田●同じく学際融合教育推進センターが「京大 100 人論文」[6]というイベントで共同研究を推進したりしていますよね。地域研究同士だけでなく、地域研究×情報学に関してもそういうリソースリストやイベントが重要かもしれません。ずっと、地域研究×情報学が難しいというのは旧地域研でも問題になってきました。私に対して「『論文にならないから』とか言わずに（情報技術の実装を）やって」っていうのは私はここで雇われているから業務として呑めますけれど、他の情報系研究者を連れてくるときに同じことは言いにくいです。そこで、まずはデータをオープンデータセットとして出してしまって、勝手に使ってもらって、そこから連携をはじめるというアプローチを柳澤さんと考えているところです。

中山●人文系同士では共同研究やっても個人プレーの寄せ集めで、データを共有したりはあまりしないですね。データベースの作成が地域研究者同士に対してもそういう協働を生むきっかけになったらいいと思うんですけど

ね。データベースを使った人と共同研究するとか。論文としては研究成果は公開されますけれど、集めた資料目録とかは必ずしも公開されているわけではない。

亀田●それは困りますよね、後の人が検証しようとか、新しい史料が出てきたから比較検討しようとしたときに、そういう研究ができなくなってしまう。そこらへんはMyデータベースみたいなツールが打ち破れるといいですね。人員はいないのに色々頑張ることになってるので、連携が大事になってきます。お金もそういう部分につけていかなきゃいけない。共同利用・共同研究拠点としての側面からは当然のことですけれど。そして活動を拡大するけれども、みんなのエフォートは限られているので、雑用の削減も大事です。

中山●そういう体制づくりに関して、若手からも積極的に発言していかなければいけないですよね。

亀田●そうですね。そういう新研究所で強化していきたいと私たちが思っていることの発信として、このニュースレターの対談をみなさんに受け取っていただければと思います。今日はありがとうございました。

中山●ありがとうございました。

① この対談は2016/11/7、地域研究コンソーシアム（JCAS）2016年度年次集会・シンポジウム（11/5-6）の翌日に行った。

② 国家の安全保障の観点から他国の情報を収集する活動を指す言葉。ここでは安全保障をはじめとした国の都合を考えた、他国に関する研究活動一般を指している。

③ 旧地域研で提供してきた研究者のデータベース構築・公開支援サービス。

④ http://lod-cloud.net/

⑤ 問答：学問に熱心な京大生のための対話場あっせん https://mondo.cpier.kyoto-u.ac.jp/

⑥「京大100人論文」（H27年度総長裁量経費事業）http://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/2015/11/h27%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E7%B7%8F%E9%95%B7%E8%A3%81%E9%87%8F%E7%B5%8C%E8%B2%BB%E4%BA%8B%E6%A5%AD/

●亀田　尭宙（かめだ　あきひろ）

東京大学大学院情報理工学系研究科博士課程単位取得退学。情報・システム研究機構特任研究員を経て、2014年10月から現職。環境学修士。主な業績として、“Extraction of Semantic Relationships from Academic Papers using Syntactic Patterns” eKNOW 2013 (2013) など。

●中山　大将（なかやま　たいしょう）

京都大学大学院農学研究科博士後期課程生物資源経済学専攻修了。京都大学博士（農学）、京都大学大学院文学研究科GCOE研究員、日本学術振興会特別研究員PD（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター所属）を経て、2015年4月から現職。主な業績として、『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成―周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』京都大学学術出版会（2014）など。

地域研究統合情報センターから東南アジア地域研究研究所へ

地域研究統合情報センターは、地域研究者コミュニティーの要請に基づいて、2006年に全国共同利用施設として発足しました。人間文化研究機構国立民族学博物館に附置されていた地域研究企画交流センターの事業を継承しつつ、共同利用共同研究拠点という新たなミッションを開始してから10年が過ぎました。現在では全国的な認知度も上がり、数々の研究成果も評価されるようになり、本年度4月には創立10周年の記念式典と記念祝賀会を挙行することができました。これは、文部科学省をはじめとする関連機関、地域研究コンソーシアム等の地域研究コミュニティー、そして大学本部や学内の関連部局によるご支援のおかげです。あらためて御礼を申し上げます。

地域研究統合情報センターの特色は、共同利用共同研究拠点としてのミッションに加え、特定の地域名を冠しない研究センターとして世界諸地域を研究対象とするとともに、相関型地域研究および地域情報学という2つの研究領域の開拓を目指していることです。国境や文化圏を越えるヒト・カネ・モノの量・速度が増大し、一地域におけるテロや感染症などの影響が、短時間で世界各地に波及するようになりました。さらに、世界をリードできる覇権国が存在しない状況が現れ、一方的な国境線の変更や影響圏の拡大を地域強国が辞さない時代に再突入しつつあるようです。我々が馴染んできた世界観（モデル）はもはや通用せず、地域研究には新しいモデルの構築が期待されています。そのためには、空間的には一軒の家から大陸あるいは全球規模まで、時間的には分秒から百年あるいは千年単位まで、学問的には個別研究から融合研究へと、地域をさまざまな物差しと尺度で測る必要があります。

地域を複数の物差しで測る比較研究の試みが「相関型地域研究」であり、地域研究統合情報センターでは、地域横断的あるいは分野横断的なプロジェクト研究や共同研究を数多く展開してきました。昨年度は、相関地域研究プロジェクト「〈地域〉を測量（はか）る—21世紀の『地域』像」を中心に4プロジェクト、計25件の共同研究を実施し、のべ200名以上の研究者が参加いたしました。その成果としてCIAS叢書の刊行、さらにCIAS叢書サブシリーズとして京都大学学術出版会から「情報とフィールド科学」ブックレット3冊、青弓社から「相関地域研究」2冊、京都大学学術出版会から「災害対応の地域研究」2冊を刊行しました。成果刊行物の出版は継続しています。

多様な物差しで計測されたデータ（情報）を収集・蓄積・共有・分析する情報学的研究の試みが「地域情報学」です。データベースの構築を支援するMyデータベース、そこに蓄積されたデータの高度利用を支援するREST型API、さらに複数のデータベースを統合検索する資源共有化システムなどの研究開発を進めています。これまでに、雑誌記事などの多様なデータベースを50以上構築しています。また、学術書に付与したQRコードからデータベースに蓄積された画像データを表示するマルチメディア刊行物や、イスラム系総合月刊誌『カラム』の画像画面とテキスト画面を連動させた新しいユーザインタフェースなど、他の地域研究機関にはないオリジナリティの高い研究成果を上げています。

第3期中期目標期間においても、このような地域研究統合情報センターの強みと特徴を活かした新しい達成目標を設定しました。相関型地域研究においては、「ラテンアメリカ研究ハブ形成事業」を発展させた「環太平洋研究ハブ形成事業」が立ち上がりました。これは、アメリカ大陸を出発点にオセアニアまで視野を広げるとともに、京都大学で蓄積されてきた東南アジア、東アジア、ユーラシアに関する研究活動と連携することを目指した野心的な地域研究を模索するものです。地域情報学においても、サイバー空間やクラウドやビッグデータなど急速な進化と変容を遂げているネットワーク社会に対応した次世代地域研究データベースの構築を目指します。そのために、セマンティックWebやテキストマイニングや人工知能などの最新技術を駆使した応用研究を、学内関連部局との連携のもとで開始しました。

しかし、発足時には13名であった定員は11名に減り、運営交付金の削減も続く中で、このような野心的な研究テーマを推進することは極めて困難です。この状況を克服するためには、既存の枠組みを超えた組織の機能強化が不可欠と判断しました。そこで地域研究統合情報センターは、東南アジア研究所と統合再編し、2017年1月1日より東南アジア地域研究研究所として再出発することにいたしました。両センター・研究所の研究資源を効果的に運用し、それぞれの成果と強みをさらに発展させていくだけではなく、シナジー効果による新しい研究課題の展開を目論んでいます。その前途が必ずしも平坦でないことは理解しておりますが、京都大学の研究所として、常に独創的な地域研究を展開することが重要であると考えています。

地域研究統合情報センターニューズレターは、これが最後となりますが、地域研究コミュニティーの皆様のこれまでのご助力とご協力に感謝申し上げると同時に、新研究所になっても、ますますのご支援を賜るようお願い申しあげます。

（原 正一郎）

CIAS 創立 10 周年記念ワークショップ 開催報告

〈地域〉を測量る〜混迷する現代世界にむけて〜

地域研は、複層的で相互に乗り入れできる、他機関にはないユニークな編成で数多くの共同研究を運営してきた。その活動の 10 年を記念するにあたり、４つの複合領域を束ねる統括班を軸にした研究成果をまとめるとともに、個々の課題から今後の展開へとむけた話題提供を通じて、現代世界へ提言することを目的とした。2006 年度から 2009 年度までの「21 世紀の国家像」、それをうけた 2015 年度までの「地域を測量る」のメンバーが、①新自由主義の浸透と社会への影響に関する地域間比較、②「包摂と排除」からみる地域社会の諸相、③生活世界を基礎づける生態システムからの自然資源と地域社会の関係、④〈宗教〉的な営みを動態的に形成する地域世界の展望を試みた。いずれも既存の制度の周縁に視座を据えることで、制度の中心部分を新たな諸相のもとに照らしだした。趣旨説明（林行夫）に続き「21 世紀における国家の行方」（村上勇介）、

「無、一、二、複数:国籍を数える」（小森宏美･早稲田大学）、「生態環境を測量る―ローカルな生態史から考える」（柳澤雅之）、「制度の隙間の宗教的なる営み」（林）の発表を行い、臼杵陽（日本女子大学）からコメントがなされた。本会の参集者は 78 名であった。直後に設立 10 周年記念祝賀会が本学総長、人間文化研究機構長らの臨席のもとで挙行された。

（林 行夫）

地域研 10 周年記念祝賀会

地域研の毎年の恒例行事であり、二日間にわたる共同研究ワークショップおよび共同利用・共同研究報告会の間に、地域研創立 10 周年を記念した祝賀会を開催し、多忙な折にもかかわらず 106 名の方々にご参加いただくことができた。地域研は創立 10 周年であり、かつ、次年度からは組織再編を控えている。そのことも反映し、祝賀会の席では、山極壽一・京大総長をはじめ、ご列席いただいた来賓の方々から、地域研のこれまでの活動を見直すだけでなく、今後の方向を考える上でも貴重な祝辞を頂くことができた。また、歓談の合間にも、組織を越え、分野を越えて、意見が交わされる貴重な機会となった。

（柳澤 雅之）

京都大学地域研究統合情報センター創立 10 周年記念祝賀会

日時　平成 28 年 4 月 23 日(土)17 時 30 分～19 時 30 分
場所　京都大学稲盛財団記念館 3 階大会議室

次第

司会　地域研究統合情報センター副センター長　貴志　俊彦

開会挨拶

式辞　地域研究統合情報センター長　恵　正一郎

総長挨拶　京都大学総長　山極　壽一

祝辞　文部科学省学術機関課長　牛尾　剛文　様

人間文化研究機構長　立本　成文　様

乾杯の辞　京都大学名誉教授(地域研究統合情報センター元センター長)
田中　耕司

(歓談)

祝辞　総合地球環境学研究所長　安成　哲三　様

国立民族学博物館副館長　西尾　哲夫　様

東南アジア研究所長　河野　泰之

閉会挨拶

★★ 受賞 ★★

村上准教授が大同生命地域研究奨励賞を受賞

ペルーを中心とするラテンアメリカの政治動態の研究が評価され、村上准教授が2016年度(第31回)大同生命地域研究奨励賞を受賞しました。同賞は、さまざまな地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている「地球的規模における地域研究」の発展、展開に貢献した研究者や関係者を顕彰する目的で、大同生命国際文化基金が設けているものです。

評価されたのは次のような三点です。第一に、ペルーを中心とするラテンアメリカ諸国の国家と社会の変動動態過程について、フィールド調査に基づきマクロ、ミクロ両面から実証的な研究を行ない、国内外で高く評価されてきたことです。第二に、そうした研究から得られた知見をもとにラテンアメリカ諸国のあいだ、そしてラテンアメリカと中東欧・ロシアなどラテンアメリカ以外の地域とのあいだの比較分析研究を進めてきたことです。第三に、国内外の学会に深く関与してその発展に寄与するとともに、国際的な学術交流を推進する一方、研究成果を地域開発の実践につなげるなどの社会還元にも尽力してきたことです。

贈呈式は、7月22日にクラブ関西（大阪市）で開催されました。

「災害対応の地域研究」プロジェクトが地域研究コンソーシアム賞を受賞

このたび私が代表者として進めてきた「災害対応の地域研究」プロジェクトおよびその成果としての「災害対応の地域研究」叢書シリーズ（全5巻）の刊行が、2016年度の地域研究コンソーシアム賞（研究企画賞）を受賞しました。2004年12月から取り組んできたこのプロジェクトには、教員・事務スタッフをはじめとするセンター内外の多くの方々の支援や協力をいただきました。また、叢書シリーズの刊行にあたっては、編者・執筆者の方々、京都大学学術出版会の担当の方々およびセンターに大変お世話になりました。

「災害対応の地域研究」はセンターの事業として位置づけられていないプロジェクトで、地域情報学や公募共同研究をはじめとするセンター内外の様々な研究プロジェクトとの共催により進めてきました。このことが結果として理工系の研究者や人道支援・マスメディアの実務者との幅広い連携につながりました。

2004年のスマトラ島沖地震・津波（インド洋津波）を契機に「災害対応の地域研究」に取り組むようになったため、当初はスマトラ（インドネシア）を中心に研究を進めてきましたが、現在では対象地域をインドネシア、フィリピン、マレーシアの3国に拡大して、災害対応に関心を持つ研究者・実務者と共通の課題に取り組むプロジェクトを進めています。

（山本 博之）

★★ 受賞 ★★

中山大将（地域研・助教）著『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成：周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』（京都大学学術出版会、2014 年）が 2016 年 3 月に日本農業史学会賞を受賞

本書は博士論文を基に京都大学学術出版会からプリミエ・コレクションとして刊行されたものです。樺太（1905~45 年にかけて日本の施政下にあったサハリン島南部）の農業拓殖問題、特に米食撤廃論を軸に、農業村落の形成過程から現地メディア上の言説までを分析し、樺太移民社会の形成過程を農業社会史という観点から明らかにすることを試みました。

博士論文の書籍化は若手研究者のキャリア形成のために必須のものとされておりますが、その困難さから、若手同士が顔を合わせると本当に必要なのかという話題にもなります。私自身の経験から言えば、編集を担当してくださった、鈴木哲也氏（『学術書を書く』同会、2015 年）のご指導ご助言もあり、研究者としても多くのことを考える機会となり、博士論文と書籍化された本書とでは大きく質が異なるものとなりました。京都大学学術リポジトリで公開されている博士論文には 1,900 を超えるアクセス数がありますが、博士論文を読んでくださった方には、ぜひ本書にも目を通していただければと願います。

博士論文と本書の大きな違いのひとつとして、「日本史」という壁を乗り越えたより大きな「境界地域史」という観点を持てたことがあるかと思います。これは、本書執筆当時、日本学術振興会特別研究員として北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターに所属し、異なる地域を研究している若手研究者たちと交流した成果のひとつです。

関係各位に改めて御礼申し上げます。

（中山 大将）

イベント

JCAS シンポジウムとワークショップの開催報告

JCAS 年次集会にあわせて、シンポジウム「2050 年の世界と日本―地域研究の推進体制」（2016 年 11 月 5 日）およびワークショップ「地域研究の底力―現場から考える」（11 月 6 日）が開催された。設立から 12 年を迎えた JCAS は、加盟組織が約 100 を数え、次世代育成など多様な事業を展開しており、現在、加盟組織の一層の参加を可能にするような事業の見直しに取り組んでいる。シンポジウムでは組織・制度の面から、ワークショップでは教育・研究・連携の活動内容の面から、JCAS のあり方を検討した。

JCAS の活動の海外への展開や組織・地域を結ぶ情報資源の共有化など多くのことが議論されたが、ここでは 2 点だけ紹介したい。(1) 加盟組織間の地域研究への臨み方の差異。共同研究によって大型の研究費を獲得するという発想に馴染んだ研究所・センターからは、地域研究の枠で大型の研究費が取りにくくなったという意味で「地域研究の賞味期限は切れた」という見方も出されたが、個別の研究活動や大学・大学院教育の現場では地域研究の重要性はますます高まっている。(2) 日本国内の地方研究。現在の子どもたちが成人して社会を支える頃までに世界各地で人の移動が一層盛んになっていると考えるならば、社会の混成性への対応は日本社会にとって重要な課題であり、現在の世界各地の様子を理解することが不可欠である。JCAS が日本国内の地方研究を対象に含めるべきことは明らかである。

（山本 博之）

イベント

研究会「2016 年フィリピン大統領選挙を考える」(2016 年 6 月 10 日) 報告

選挙を契機とした地域理解の見直し

地域研究者にとって選挙は地域の動向を知るものさしの一つであり、同時に、自身がもつ地域理解の妥当性を検証する機会である。2016 年 5 月に行われたフィリピン大統領選挙は、犯罪の撲滅などを訴え過激な発言で知られる元ダバオ市長のロドリゴ・ドゥテルテが他の候補者を大きく引き離して当選したことで、フィリピン内外の注目を集めた。過激な発言をはじめとするドゥテルテの型破りなキャラクターや、国政レベルでは新顔であるドゥテルテの政策の「読めなさ」がメディアの関心を集めただけでなく、階層、地方、宗教、民族などの切り口や有力家族どうしの競合などの従来の見方だけではドゥテルテへの支持を十分に理解できなかったことがその背景にある。このことは、2016 年の選挙が従来のフィリピン理解に見直しを迫るものだったことを意味している。

本研究会では、フィリピン研究の各分野の専門家がそれぞれの知見を持ち寄り、2016 年フィリピン大統領選挙・副大統領選挙（および同時に行われた国政・地方統一選挙）でフィリピンの人々が何を考えて何を選択したのかが検討された。そのなかで、フィリピン理解を深めていくうえで重要な切り口として以下の 2 つが指摘された。(1)30 年前のピープルパワー革命の見直し。「独裁者」マルコス元大統領の息子が父親の統治を肯定的に総括した上で副大統領選挙戦に臨み一定の得票数を獲得した。このことを踏まえて、フィリピン社会はマルコス時代とその後の革命をどのように評価していると見るか。(2) 在外フィリピン人の存在。フィリピンは在外不在者投票の制度が整えられており、潜在的な在外不在者登録者数を含めれば、在外フィリピン人の投票が選挙に与える影響は小さくない。在外フィリピン人がフィリピン政治に与える潜在的な影響力はフィリピン政治をどのように変えうるか。

選挙から間もない 6 月に開催された本研究会に、マルコス時代に現地調査していたシニア研究者から、現在、現地調査をしている大学院生まで幅広い世代の研究者が集ったことは、2016 年選挙がフィリピン研究において世代や分野を越えて共有できる課題を投げかけていることを示している。

（西 芳実）

国際ワークショップ
“Buddhism and Contemporary Living Environment over Asia” を開催

国際ワークショップ “Buddhism and Contemporary Living Environment over Asia” を、科学研究費基盤 (C)「近代仏教建築の展開とアジア／亜細亜の形成・離散」（代表：山田協太）と mAAN (modern Asian Architecture Network) スタディーズ、地域研究統合情報センターの共催により、2016 年 3 月 12 日に地域研セミナー室で開催した。

2013 ～ 15 年度におこなった科研費研究の成果報告であり、共同研究者サミタ・マナワドゥ上級教授（モラトゥワ大学建築学科、スリランカ）とナウィット・オンサワンチャイ助教（チェンマイ大学建築学部、タイ）を招へいし、3 つの個別報告と総合討論をおこなった。

個別報告では、山田が、京都を中心に日本の近代化と仏教とその建築との関わり、および仏教建築からみるスリランカ、インド、タイとの同時代的関わりを論じ、ナウィット助教は、バンコク、チェンマイを中心に、都市から家庭までの各スケールで見られる信仰の形の歴史的展開と現在を論じた。サミタ教授は、コロンボ、キャンディを中心に、仏教僧院の歴史的変遷、および世俗の信仰を論じた。

19 世紀から今日のスリランカ、タイ、日本での、仏教をつうじた都市と居住環境の近代化の展開の独自性と共通性を捉える多数の視点が提示され、実り多い議論となった。

3 月 14 日には京都の近代仏教建築をめぐるフィールド・トリップをおこなった。

（山田 協太）

参考資料

Programme

Opening Remarks
Susumu Mizuta (Hiroshima University)

Presentation 1
“Modern Buddhism Architecture in Japan and its Linkage to Contemporary Asian Buddhism Movement: Indian Ocean Network and Kyoto”
Kyota Yamada (Kyoto University)

Presentation 2
Nawit Ongsavangchai (Chiang Mai University)
“Buddhism and Daily Life: Contemporary Living Environment in Thailand”

Coffee Break

Presentation 3
Samitha Manawadu (University of Moratuwa)
“Myths, Beliefs and Transformation of Sri Lankan Buddhist Monastic Living Environments: With Particular Attention to the Modern Buddhist Monastic Architecture”

General Discussion
Commentator: Ryuichi Tanigawa (Kanazawa University)

International Workshop “Toward Building Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia” の開催報告

インドネシア、フィリピン、マレーシア、日本の４カ国で防災・災害対応に関心を持つ研究者・実務者が共通の課題を議論するJSPS 拠点形成事業の２年目となる 2016 年７月、京都大学稲盛財団記念館でワークショップを開催した。あわせて、熊本地震の被災地を訪れてフィールド調査を行った。

日本は防災研究の先進国だが、日本の防災研究は、(1) 日本の事例が中心、(2) 理工系の対応が中心、(3) 災害を他の課題と切り離す、という特徴がある。近年東南アジアでは政策面でも学術面でも災害対応の取り組みが進んでおり、日本と東南アジアの防災・災害対応が互いに接合せずにそれぞれ発展することを防ぐため、日本と東南アジアの防災・災害対応に関心を持つ人文社会系の研究者ネットワークの形成が重要である。

日本と東南アジアの災害対応の共同研究は社会のレジリエンスについて総合的に考えることにつながる。災害対応に関して東南アジアの研究者からしばしば指摘されるのは、東南アジアで災害後の自殺はまず見られないということである。日本では一般に災害後の自殺は災害による被害に含められないが、災害に起因する犠牲を全て含めてその軽減を考えるならば、日本の制度的・技術的な防災と東南アジアの心理的・社会的な災害対応を統合して災害に打たれ強い社会を作る道を考える意味があるかもしれない。

（山本 博之）

研究会「写真が開く地域研究」開催報告

日本の研究者が海外学術調査の際に撮影した写真や動画資料は、調査時点の現地の様子を記録した貴重な研究資源である。地域研究の進展のため、これらの資料を集積するためのプラットフォームを構築する事業が 2015 年度から開始された（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成事業』「地域に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（代表：吉田憲司・国立民族学博物館教授・副館長））。その第一歩として、写真を中心とする画像データベースの活用に関する研究会「写真が開く地域研究」が、2016 年６月 13 日京都大学稲盛財団記念館で開催された。地域研からは、柳澤雅之・准教授が「フィールドノートから地域を探る―地域情報学の試み」と題する研究発表を行い、地域研の地域情報学プロジェクトで進めてきた高谷フィールドノートの整理と活用について報告を行った。その他に、南真木人（国立民族学博物館・准教授）「民博ネパール写真データベースとその後の展開」と中村美知夫（京都大学・准教授）「チンパンジー研究者、西田利貞が遺した 1960 ～ 1970 年代タンザニアの写真―京大博物館による研究資源アーカイブ化」の報告があり、いずれも、当時の海外でのフィールドワークの成果を今後の研究にいかに生かすことができるかという未来志向の議論を展開することができ、地域研や関連機関との今後の連携を考えるための重要な研究会となった。

（柳澤 雅之）

国際ワークショップ
“Harvard-Yenching Library New Holdings in Manchukuo History: Needs and Opportunities”

■ 2016 年 5 月 19 日（木）
■ハーバード大学イェンチン図書館コモンルーム

ハーバード大学イェンチン図書館は、新規購入した満洲コレクションに関するミニ展示会とともに、このコレクションを巡る共同利用のあり方に関する国際ワークショップを企画した。この企画は、同図書館のクニコ・ヤマダ・マクヴェイ氏が中心となって、ハーバード大学アジアセンター、フェアバンク中国研究センター、韓国学研究所、ライシャワー日本研究所などの支援を得て実現したものである。

これまでハーバード大学の満洲関係のコレクションは、ワイドナー記念図書館、ロースクール図書館に欧文資料、イェンチン図書館に日本語、中国語資料が所蔵されていた。今回これらを補完する形で、日本や中国で購入された書籍や雑誌だけでなく、日記、写真帳、スクラップブック、楽譜、プロパガンダ・ポスター、絵葉書、旅行案内など、多様なコンテンツ 2000 点以上が加わった。ワークショップは、これら新蔵資料の評価と、その利用について共同討議することを目的として開催された。（貴志 俊彦）

【プログラム】 1. KUNIKO YAMADA MCVEY, Harvard-Yenching Library
“Introductions, Background, Scope and Content of the Collection”
2. TOSHIHIKO KISHI, Kyoto University
“The Yenching Library Manchurian Materials in Global Perspective”
3. PAUL BARCLAY, Lafayette College & AKIHIRO KAMEDA, Kyoto University
“Manchukuo Postcards and Digital Collaboration: Needs and Opportunities”
4. Open Discussion

研究会「誤差か、発見の糸口か？ ―情報学的分析結果を学際的に評価する―」報告

地域に関する総合的な知の体系である「地域の知」を、総合的かつ精密に扱うために、地域情報学はさまざまな分野と協働して研究活動を進めている。しかし、扱うデータ量が膨大なだけでなく、文書や非文字資料など従来の情報処理技術では解析の難しい資料群や、欠損が多い資料の扱いなど、地域の知が対象とするデータの分析では、結果の妥当性を判断することが大変難しい。地域研究側と情報学側が、それぞれの分析手法の妥当性を主張するだけでなく、分野を超えて判断するための取り組みがどうしても必要となる。本研究会では、東京大学空間情報科学研究センターの全面的な協力のもと、両機関の日々の学際的研究活動の中で直面する、分析結果の妥当性判断の実践を開陳し、「地域の知」を学際的に分析可能とするためのアイデアについて議論した。話題提供者と発表タイトルを以下に記す（東京大学空間情報科学研究センターは CSIS と略称）。

藤原 直哉（CSIS）「人流データを用いた感染症数理モデルの、エラーに対する頑健性」
川口 洋（帝塚山大学）「明治 8（1875）年の足柄県における種痘の普及：希少史料から歴史像・地域像・民衆像を提案する道程」
早川 裕弐（CSIS）「地考古学現場における高精細計測の最新動向と景観復元の試み」
桐村 喬（CSIS）「小地域統計による長期的な都市内部構造の変化の分析」
柳澤 雅之（地域研）「地域情報学の読み解き―発見のツールとしての時空間表示とテキスト分析」

研究会での議論は多方面におよんだが、研究会のテーマに即して個人的に興味深かったのは、研究資料の現物よりも情報学的処理を経た資料のほうが時として精確であることと、可視化の精密さと発見の糸口になりうるかどうかの間にはまだ大きな壁が存在することであった。両組織での取り組みと存在意義にまで議論がおよび、大変刺激的かつ有益な研究会となった。（柳澤 雅之）

旅紀行

アジア農村研究会の南インド訪問記

柳澤　雅之　高次情報処理研究部門准教授。専門は農業生態学、ベトナム地域研究、東南アジア生態史

AD2 世紀に建設された水利施設が今でも現役で使われているという。インドの歴史が古いのは常識であるが、1990 年代以降の経済発展下におけるドラスティックな変化も近年のインドの特徴である。自分が主な研究対象としている東南アジアと同様に、急速な経済変化の中で変わるものと変わらないものを見極めながら社会を理解する必要がある。そこで、ひとつの広大な流域を対象に、モンスーンに由来する降水条件の違いや、上下流における水利用をめぐる変化、さらには、都市と農村の関係、宗教・言語・習慣の違い、カーストに代表される社会構造の違いなどを比較の軸として設定し、南インド・カーベリー河流域の社会経済的な変化を理解するための広域調査を、アジア農村研究会の海外調査実習として 2016 年 7 月に実施した。

調査行では、タミルナドゥ州・コインバトールを基点とし、まず、西ガーツ山脈を越えてケーララ州に入り、その後、カルナータカ州・マイソールを経由してバンガロールに向かった。アラビア海を渡り湿気を含んだモンスーンは、西ガーツ山脈にぶつかるとケーララ州側に大量の降水をもたらした後、山を越えたカルナータカ州やタミルナドゥ州では冷涼で乾燥した風になる。そのため、山脈を越えると景観は一変し、ケーララ州側のココヤシやスパイス類の樹木が織りなす緑の濃い景観は、山を越えると、地下水を利用した野菜やココヤシ、牧草栽培が織りなす牧歌的な緑色と、天水に依存したトウジンビエやソルガム、放棄された圃場からなるモザイク状の赤茶色が明瞭なコントラストをなす景観となる。カーベリー河上流に位置するという有利な条件を利用し、カルナータカ州では灌漑網の整備や有名な ICT シティであるバンガロールなど、都市での水利用を増大させた。その結果、特にモンスーンによる降水が十分でない年、カーベリー河下流では利用可能な水の量が激減したという。上流と下流の水争いは年々、激しさを増し、高等裁判所における州間の訴訟にまで発展した。2007 年に司法判断が下されたものの、その決定は必ずしも守られていない。上流側にとっても水の確保は死活問題だからである。私たちは、カウンターパートのタミルナドゥ農学大学の教員とともに、マイソールのマンディヤ県農業局を訪問したのだが、対応してくれた担当者は大変緊張の面持ちであった。クリシュナラジャサーガラ・ダムではゲートに自動小銃をもった武装警官が配置され、入場者のすべての荷物は金属探知機にかけられた。上流側に位置するダムに、いつ誰が何かをしでかさないとも限らないからである。その後、下流側のタミルナドゥ州に赴き、各地で、水利用の変化を聞いた。場所によっては農業生産が困難になっただけでなく、飲用水が不足するなど、事態は深刻である。しかし、利用できる水の物理的な量は限られている。人が利用方法を調整するしかない。

こうした話を、私が聞き考えている横で、例えば、同行する山田協太さん（地域研・特任助教）は、建築史の立場からケーララ州の古いイスラームのモスクの歴史やマイソール藩王国時代の建築の話、タミルナドゥ州の東海岸沿いにある交易拠点ナガパティナムの歴史や街並みの変化、インド人金融業の先駆けであるチェッティナード出身の商人の歴史について解説し、また、有志で町の図面をとったりした。他の参加者もそれぞれの専門分野から、インドの歴史や開発プロセスの特徴、州間の政治的対応の違い、東南アジアへのインド移民の歴史、海外実習カリキュラムの作成に必要なことなど、さまざまなことを議論することができた。参加者の関心が時に交差し、思わぬ関連性の発見につながった。旅は、学際的であるのがおもしろい。

・出版物の紹介・

地域研が刊行した出版物と、地域研スタッフが執筆・編集した出版物を紹介します。

CIAS ブックレットシリーズ
情報とフィールド科学 2
灯台から考える海の近代

- 谷川竜一 著
- 京都大学学術出版会
- A5 並製・80 頁・税込 756 円
  ISBN: 9784814000036
- 2016 年 3 月

CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.58
EVALUACIÓN HISTÓRICA DE LAS RELACIONES ECONÓMICAS JAPÓN-CUBA

- Takashi Tanaka
- A4 判・18 頁
- 2016 年 1 月

CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.65
HONDURAS POLÍTICAS DE AJUSTE, INEQUIDAD Y CRECIMIENTO 1980-2013

- Braulio Serna Hidalgo
- A4 判・34 頁
- 2016 年 2 月

CIAS ブックレットシリーズ
情報とフィールド科学 3
雑誌から見る社会

- 山本博之 著
- 京都大学学術出版会
- A5 並製・64 頁・税込 756 円
  ISBN: 9784814000043
- 2016 年 3 月

CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.59
森をめぐるコンソナンスとディソナンス 熱帯雨林帯地域社会の比較研究

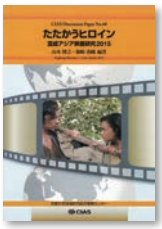
- 竹内潔・阿部健一・柳澤雅之 編
- A4 判・84 頁
- 2016 年 3 月

CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.66
声を繋ぎ、掘り起こす 多声化社会の葛藤とメディア

- 王柳蘭 編著
- A4 判・92 頁
- 2016 年 3 月

CIAS ブックレットシリーズ
情報とフィールド科学 4
被災地に寄り添う社会調査

- 西芳実 著
- 京都大学学術出版会
- A5 並製・72 頁・税込 756 円
  ISBN: 9784814000371
- 2016 年 3 月



CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.60
たたかうヒロイン 混成アジア映画研究 2015

- 山本博之・篠崎香織 編著
- A4 判・112 頁
- 2016 年 3 月

JCAS Collaboration Series
JCAS Collaboration No.13
JCAS 公開シンポジウム報告書
境界・境域への挑戦と「地域」

- 黒木英充・塩谷昌史・柳澤雅之 編
- 地域研究コンソーシアム
  京都大学地域研究統合情報センター
  東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- A4 判・65 頁
- 2016 年 3 月

雑誌『地域研究』
地域研究 Vol.16 No.1
総特集 ロシアとヨーロッパの狭間（はざま） ウクライナ問題と地域史から考える

- 地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会編
- 昭和堂
- A5 判・300 頁・税込 2,592 円
  ISBN: 9784812215197
- 2015 年 11 月

CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.61
都市の近代化と現代文化 ブラジル・日本の対話から

- アンドレア・ユリ・フロレス・ウルシマ／ハケル・アビサッマラ／ムリロ・ジャルデリノ・ダコスタ 編
- A4 判・122 頁
- 2015 年 3 月

スタッフの刊行物
フィールドから考える 地球の未来（地球研叢書）

- 関野樹 監修
  原正一郎・貴志俊彦・柴山守・村上勇介・山本博之・谷川竜一他共著
- 昭和堂
- A5 判・286 頁・税込 2,700 円
  ISBN: 9784812215517
- 2016 年 3 月

雑誌『地域研究』
地域研究 Vol.16 No.2
総特集 中口の台頭と欧米覇権の将来

- 地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会編
- 昭和堂
- A5 判・300 頁・税込 2,592 円
  ISBN: 9784812215494
- 2016 年 3 月

CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.62
『カラム』の時代 VII コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践

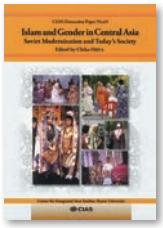
- 坪井祐司・山本博之 編著
- A4 判・96 頁
- 2016 年 3 月

スタッフの刊行物
京都大学人文科学研究所所蔵 華北交通写真資料集成 全 2 巻

- 貴志俊彦・白山眞理 編
- 国書刊行会
- A4 判・税込 28,080 円
  ISBN: 9784336060884
- 2016 年 11 月

CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.56
せめぎあう眼差し 相関する地域を読み解く

- 福田宏・柳澤雅之 編
- A4 判・52 頁
- 2016 年 3 月



CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.63
Islam and Gender in Central Asia Soviet Modernization and Today's Society

- Chika Obiya (ed.)
- A4 判・78 頁
- 2015 年 3 月

CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.57
BRICs 諸国のいま 2010 年代世界の位相

- 村上勇介 編
- A4 判・44 頁
- 2015 年 3 月

CIAS Discussion Paper Series
CIAS Discussion Paper No.64
アフロ・ブラジル文化のカポエイラ・アンゴーラ 対話する身体がつなぐ世界

- アンドレア・ユリ・フロレス・ウルシマ／荒川幸祐／王柳蘭 編著
- A4 判・102 頁
- 2016 年 3 月

退職にあたって

今年度限りで現職を辞すことになりました。人生はフィールドワークと同じ。予測不能。でも、すべての出来事は因果の連鎖にあるようです。2006年からの地域研での11年は、それまで在籍した東南研と大きく異なる経験と価値をもつものでした。地域名を冠しない、情報学を柱とする、地域研究コンソーシアムの事務局を担う。多彩な共同研究で専門や地域を異にする人と出逢い新たな課題を試みる。妙なたとえですが、学問の「内蔵」にむきあうような刺激に満ちていました。運営面でも、創設以来何度もの制度改変に応じてスタッフの一人一人が知恵をしぼり、研究活動を拡張しました。改変が甚だしい時間ロスとストレスをうんだのは事実です。だが全速で走りフルスウィングした。そして地域研究の手法面での新たな試み、地域研究者のネットワークづくりと活性化に邁進した。少人数ながら異なる地域、領域に関わるスタッフが鋭意取り組んだ。見事な実践、活動ぶりだったと思います。展開してきたすべての活動領域で成果がでそろったわけではないけれど、新たな方向性と知見は確かに研ぎ澄まされた。何度も耕された土壌は、これから必ずや豊かな恵みをもたらすはずです。

私事ながら、センター長だった4年の間に両親を含む3人の肉親、恩師、かつての同僚、そして同期の友人が立て続けにこの世を去りました。そのたびに心にあいた穴がどんどん大きくなり、空虚感に苛まれました。それでも、形だけでも業務を遂行できたのは、当時副センター長の原さん、突然部屋にやってきて独創的な研究を熱く語った若き同僚、そして研究支援室のみなさんでした。お一人一人のそれぞれのことばに何度も救われた。偶然の重なりが日々を繋いでくれていました。宝もののようなみなさんに、心から感謝します。

1993年に旧東南研に異動して初の渡航が初めてのカンボジアでの寺院と出家行動の調査でした。プノンペンの市場でUNTACが売り払っていった地図をかき集め、似非「高谷式」に車の距離計をセットして地図上に位置をおとす。訪問先で一人ずつの聞き取りを繰り返す。まさかその13年後に地域研でGPSで調査範囲を東南アジア大陸部全域に拡げた寺院マッピングプロジェクトを開始するとは、思いもよりません。また、現在も進行中の同プロジェクトの成果報告を今秋カンボジアで実施したことにも、じつに不思議な巡りあわせを感じます。

来年度からは調査研究以上に、これまで得た知見を主に学部学生に伝える環境に身をおきます。14年間大学院を併任したものの、新たな気持ちで向き合いたいと思います。あらためて、地域研と地域研でめぐり逢えたみなさんと、これまでのさまざまな出来事に深く御礼もうしあげます。ありがとうございました。そして地域研が築いてきた知見と人材、ガッツが、来年度からも強力に展開されることを強く願っております。

また、元気でお逢いしましょう。　　（林 行夫）

新任紹介

松浦先生が着任されました

これまでコミュニティメディアに関心をもって研究して参りました。

そのひとつ日本のコミュニティ放送は、来年で制度創設25年、2016年9月時点で303局が運営され、住民参加、地域活性化、地域情報提供などの目的で放送する小さなラジオです。東日本大震災以後「防災」、「強靭化」が重要命題となり、自治体にもその活用を呼びかけています。コミュニティラジオは9割がコミュニティ、1割がラジオと言われ、「大切なのはコミュニティ」という認識は世界共通のようです。

それまでは放送への市民参加をテーマに欧米各地を訪ねていましたが、2008年にAMARC世界コミュニティラジオ放送連盟を通じて、東南アジアでもコミュニティラジオが、民主主義、人権、社会的包摂、社会正義、平和構築などさまざまな社会的政治的課題について、ジェンダーバランスに配慮し地域住民の視点にもとづくクリティカルな放送をしていると知りました。

日本のコミュニティ放送は生活情報が中心です。なぜ世界と異なっているのか、その是非はともかく興味はそこにあります。英国では、受信料で支える公共放送が国民をつくり、広告費で支える商業放送が消費者をつくるといわれ、その「複占」が早くから問題でした。また放送通信融合の時代に、コミュニティメディアが創造する諸価値について、とくに各地の文化を熟知されている地域研のみなさまの知見にご示唆をいただけるとうれしく存じます。（了）　（松浦 さと子）

The Last Photograph

支援室の窓から見える風景

京大の西の片隅にあるこの部屋からは四季の移ろいを手に取るように感じることができる。朝、ブラインドを開けて川面の煌めき、通りゆく人を眺める。風景はひと呼吸つくことをすすめる。そんな風景がもつやさしさは、支援室メンバーがもつ「構え」にも少なからず影響していたと思っている。外を眺めて気持ちをやわらげ、切り替えて、研究部の先生方が気持ちよく研究に臨めるよう日々の業務に勤しむのである……と、これは荒神口の風景について受け身に捉えたものだが、別の捉え方として、ミシマ社代表の三島氏は、自身の事業に関して湯川秀樹『旅人』の記述を引きながら「鴨川沿いを自転車で走っているとき、先人たちが託してくれた、この変わらない風景を次代へパスしていかねば、という思いに駆られる」と記している（三島邦弘「京都で出版社をするということ」『大学出版』104号、2015年、7頁）。同じ景色を見ながら捉え方はずいぶん異なるが、次代への知の継承に関してそれぞれにできることをするという思いにおいて、向かう方向はさほど違わないという気もしている。

2016年11月、支援室の窓から見える木々の紅葉は鈍色の空にひときわ映え、漂い始めたサヨナラの気配をもそっと包み込む。あとひと月もすれば地域研はその活動を終了し、支援室のメンバーの役割もひと区切りとなる。来年の紅葉が鈍色の空に映る頃、またつかの間の仲間とともに、楽しく仕事ができていることをと願う。　（伊藤 ゆかり）

京都大学地域研究統合情報センター
ニューズレター　No.19

●発行日　2016年12月25日

●発行者
京都大学地域研究統合情報センター
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
Tel：075-753-7302
Fax：075-753-9602
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/

●編集責任　亀田尭宙
●編集協力・表紙デザイン　川島淳子